

民友社ジャーナリズムと地方青年

有山 輝雄

1

1887（明治20）年前後のジャーナリズム状況の特徴のひとつは、雑誌『国民之友』や『日本人』の華々しい登場にある。『国民之友』と『日本人』、特に『国民之友』は、雑誌としては前代未聞の発行部数を獲得した。また両誌とも政治・社会・文学など様々な分野に大きな影響力をふるう評論の形式を作り出したのである。こうしたジャーナリズム活動に、現在の総合雑誌ジャーナリズムの祖型を求めることもできるだろう。

だが、『国民之友』や『日本人』といった中央メディアの活動は、1887年前後のジャーナリズム状況の一つの局面にしかすぎない。この時期、東京の民友社や政教社の活動とは別に、地方の無名の青年達による多数の雑誌が叢生し、活発な言論活動が展開されていたのである。これも、この時期のジャーナリズム状況の大きな特徴である。それをになったのは無名の地方青年達であり、彼等の活動は現在では忘れられてしまった。しかし、彼等の活動は、『国民之友』や『日本人』が実現していった上から下へ（中央から地方へ）というジャーナリズム活動とは別の可能性を示している。

それらの活動は、一面においては『国民之友』などの刺激を受けて生まれた。その点で中央メディアの果たした役割は大きい。しかし、それだけではなく、下からの自生的な活動の底流が脈々と存在していた。それが一つの刺激を鋭敏に感じとり、独自の活動を噴出していくことになったのである。

本論文では、紙幅の関係上大づかみの見取り図にとどまらざるをえないが、民友社と近い関係にあった青年たちが、独自に起こしたジャーナリズム活動を主たる考察の対象とする。これは、民友社ジャーナリズムを考える上では、迂回路ではあるが、そうした接近によってこれまでとは異なった脈落のなかで『国民之友』と民友社ジャーナリズムを考えてみたい。

「当時雑誌の発行部数は、概ね千部以下にて、通常五百、六百といふ位にて、千を越ゆれば先づ盛なりと云ふべきであつた」にも拘らず、『国民之友』は「思ひ切つて多く刷つたが、見る間に売り切れ、再刊再刊の止むなきに至り、遂に総数万位に上るに至つた」という。¹⁾ 同誌が第25号（明治21年7月6日号）及びその後の各号で発表した発行部数によれば、創刊号で7,500部、以後は着実に漸増し第26号以降は約14,000部を発行している。これは、当時発刊されていた雑誌のなかでは第1位の発行部数であった。ちなみに、『国民之友』の対抗誌であった。『日本人』の1888年の平均発行部数は、約6,673である。しかも、『国民之友』の部数は、当時の新聞と比較しても、「報知新聞」「東京日日」「時事新報」などの有力新聞を上回っていたのである。²⁾

しかも、『国民之友』の発行部数は、量的に多いだけでなく、それが全国的に広く普及したところに大きな特色があった。同誌が第15号、第58号で発表した地方別発売高によれば、地方配布が約78%である。³⁾

この地方読者の中心は豪農豪商層とその子弟であろう。なかでも、特に敏感に反応したのは、蘇峰が「新日本の青年」と呼びかけた通り、年代的には青年層であったと推測することができる。しかも、相当の知的好奇心を持った知識青年層であったろう。

当時の青年達にとって、『国民之友』の成功という事実自体が、様々な意味を持った大事件であった。特に、次の二点が重要である。一つは、衰退していた言論機能復活の象徴表現。もう一つは、青年の同輩者意識の形成であった。

まず、言論の復活という問題からいえば、盛期の自由民権運動は、言論活動と実際行動とが、表裏一体の循環的に働くことによって進展していた。しかし、明治10年代後半、政府の硬軟使い分けによる取り締まりによって、言論活動、実際行動それぞれが封じ込められ、両者の循環が断ち切られた。その結果、自由民権活動家の間には、言論の有効性への懐疑が生じ、かえって急進的 direct 行動への傾斜が深まっていった。運動は、「空論」とテロリズム的激化事件に二極分解してしまったのである。

こうした言論不信・無力感の症状として出現したのが、一つは「冷笑者流ノ

輩出」であり、また、もう一つは、「壮士」に象徴される悲憤慷慨の直情的行動である。しかも、こうした鬱屈した心情は、自由民権派青年ばかりではなく、かなり広範に広まっていたと推定できる。

こうした言論の衰弱状況に対して、華々しい『国民之友』の登場は徳富蘇峰個人の成功というばかりでなく、言論機能そのものの復権であるように見えた。『国民之友』は、「冷笑者流」と悲憤慷慨の「壮士」を仮借なく批判し、言論が、再び状況を動かす駆動力を持ち得ることを示したのである。

第二の意味は、新しい時代の担い手としての青年の存在を実感させたことである。徳富蘇峰は、周知の通り「天保の老人」に対し「明治の青年」「新日本の青年」という世代概念を提示し、青年達に訴えた。しかも、『国民之友』の読者という形でそうした「新日本の青年」の存在を顕在化してみせたのである。多数の読者の存在という事実は、単なる言葉以上のものとして「新日本の青年」の存在を実感させたのである。空間的には散在している青年は、『国民之友』の形成する共通関心によって「新日本の青年」として成立した。彼等は、互いに直接的な交流を持つことはできなかったが、活字メディアによって一定の同輩者意識が醸成されていったのである。各地に孤立していた青年達も、同輩の存在を実感し、鼓舞させられていくことになった。

しかも、『国民之友』の読者となった青年は、自足的な読者にとどまることなく、みずからも言論活動に、あるいはまた実際の行動に乗り出していく能動性をもっていたのである。寧ろ、受動的な読者に自足せず、読者であると同時にみずからも言論活動を起こしていくというのが、当時の知識青年の在り方であり、以前から細々ながら各地で多くの自主的活動が存在していた。元来、徳富蘇峰と民友社も、そうした青年運動の一つであり、そこから飛躍して成功したものとさえ見ることができる。各地の青年達は、『国民之友』に刺激を受け、それを模倣しながらも、それぞれ独自の言論と行動を生みだしていくことになった。そこに、『国民之友』の思想の直接的影響という以上のコミュニケーションの活性化状況が出現したのである。

3

『国民之友』の出現に最も敏感に反応した者達として最初にあげることができるのは、かつて徳富蘇峰の主宰していた大江義塾出身の青年達である。大江義塾の解散後、おもな生徒は相次いで上京した。⁴⁾ 彼らの多くは、東京専門学校等に入学し、勉学を続けたが、また、一部は民友社員となり、蘇峰の活動に協力した者もいる。彼等は徳富蘇峰に最も従順な青年達であったといえる。これは当然といえば当然であろう。しかも、彼等は読者であることだけに満足していなかったのである。

『国民之友』創刊間もない1887(明治20)年春頃、こうした在京の大江義塾出身者の間から結社結成、雑誌発刊の動きが生じた。発起人は、「池本吉次、人見一太郎、奈須義質、緒方直清、八木廉及他五六の諸君」であり、全て大江義塾関係者である。同年6月20日に赤坂区霊南坂町第一基督教会において青年協会という名称で正式な発会式が挙げられた。⁵⁾ 参加した者は、35名。このうち28名が大江義塾関係者であった。発会式当日は、人見一太郎、緒方直清、池本吉治、柄本伊平、宍戸蒔、松枝弥一郎、毛利次宗、檜前保人、小門林太郎の9人が惣代に選出されたが、全員が大江義塾関係者である。⁶⁾ 同会は、機関誌として、1887(明治20)年8月から『青年思海』という雑誌を発刊した。⁷⁾

青年協会設立の目的は、発起人によれば「今や天下の青年は漸く頭を社会に抬げ、稍勢力を社会に振はんとす、然れども未だ一地方に割拠し、個々に分離し、天下を通し、社会を一貫して相呼び相応して以て青年の勢力をは実事に応用せしむるものあるを見ず、故に今日の謀は先つ天下の青年を團結するの協会を造りて、青年の氣脈を通するの雑誌を発行して、相共に智識を交換し、相共に思想を融通し、青年自動の働きを以て、青年社会の氣炎を吐く可き」ことにあるとされた。新時代の担い手たるべき時機に立ちながら、いまだ互いに連絡のないまま「一地方に割拠し、個々に分離し」ている地方青年を活字媒体によって「團結」させ、結社を作ろうというのである。特に、「青年自動の働き」を強調しているところに、『国民之友』の刺激を受けながら青年独自の自立した意見発表のメディアを持つとする態度がうかがえる。

大江義塾関係者であった青年協会の中心的メンバーは、大江義塾以来の教育

によって培われた彼等の思想の表現する機会を求めていたのである。しかし、大江義塾出身の青年達は、その思想内容が『国民之友』と大同小異であったとしても、『国民之友』では自己発表の機会を十分に持てなかった。そこで、彼等は独自のメディアを自らの手で作ろうとしたのである。そのこと自体は、徳富蘇峰の思想に批判的であったということの意味している訳ではない。寧ろ、青年達は、『国民之友』の読者・編集協力者という役割にとどまらず、自らが言論の送り手となっていくことを志向していたのである。

しかも、『青年思海』のジャーナリズム活動の特色は、大江義塾出身者が送り手になるというだけでなく、全国の青年の相互的交流を目指したことである。彼等は雑誌を大江義塾関係者内部にとどめず、広く全国の青年に開放していった。それは、地方少年青年の愛好していた『穎才新誌』等の商業的投書雑誌からの連想ということもあろう。しかし、そこで、目指されたコミュニケーションは、一部の者が送り手となり、一方通行的に伝達するのではなく、「相共に智識を交換し、相共に思想を融通」という相互互換的コミュニケーションであった。『大江義塾雑誌』によって塾内で実現されていたコミュニケーションを全国的規模に拡大しようとしたものと言えよう。

徳富蘇峰の『国民之友』は、読者という形で「新日本の青年」を形成した。しかし、その読者は、相互に交流のない孤立した受け手であった。これに対し、『青年思海』は、それら青年の相互的交流を活字メディアによって実現しようとしたのである。

発起の呼び掛けに応じて、多数の青年が青年協会の加入した。こうした青年達は、『国民之友』や蘇峰の著作の読者でもあったと推測できる。『青年思海』第19号（明治22年2月15日号）によれば会員数は、1,666名であったという。各号末尾に掲載されている新入会名簿を集計し、都道府県別にまとめたものを表1に掲げた。⁹⁾

これによれば、会員は北海道から沖縄まで全国にわたっている。会員数の筆頭は、東京である。これは、在京の大江義塾出身者が周辺の青年を組織化し、それがこの頃東京に集中してきた書生達の共感を呼んだものと見ることが出来る。このほか、会員が多いのは、群馬、京都、熊本である。熊本はかつての大

表1 青年協会都道府県別会員数

府 県					
東 京	309	長 野	55	鳥 取	5
北海道	24	愛 知	21	島 根	22
青 森	15	岐 阜	10	山 口	10
岩 手	17	新 潟	22	香 川	1
宮 城	19	富 山	9	徳 島	10
秋 田	30	石 川	8	愛 媛	7
山 形	17	福 井	4	高 知	8
福 島	32	三 重	18	福 岡	22
茨 城	15	滋 賀	9	佐 賀	45
栃 木	29	京 都	66	大 分	18
群 馬	126	奈 良	0	熊 本	193
埼 玉	27	大 阪	7	長 崎	3
千 葉	31	兵 庫	24	宮 崎	13
神奈川	14	和歌山	7	鹿児島	27
山 梨	7	岡 山	21	沖 縄	1
静 岡	35	広 島	14	不 明	9

合計1443名

*第9号は、欠。

*旧国名で記載されているが、現在の都道府県名に直した。

江義塾の所在地であり、また京都は大江義塾と関係の深い同志社があり、会員の多いのは当然であろう。また、群馬は新島襄の出身地、蘇峰の義兄湯浅治郎の故郷など関係が深い、それだけでなく後述する通り青年の活動の活発さに因るところが大きいとみられる。

この会員分布を『国民之友』の読者分布と比較してみるならば、青年協会の会員は大江義塾に関係深い地域に集中する傾向が強いと言える。それだけ、青年協会会員は、『国民之友』や『将来の日本』などの熱心で活動的な読者であったと推定できるのである。

また、『青年思海』の発行部数統計を表2に掲げた。これによれば、同誌の発

行部数は、1888（明治21）年で約550部である。これは、会員数の3分の1にすぎない。会員数に較べ雑誌発行部数が著しく少ないのは、先の会員数がのべ会員数であること一因があろう。しかしそれだけでなく、各地域の会員が個人単位に雑誌を購読していたのではなく、集団として購読していたと見ることができる。会員は、集団を形成しており、一冊の雑誌を回覧したり、集会で購読したのであろう。活発な地域には、中核となる青年活動家が存在し、周辺の青年達の組織化にあっていた。「熊本に河田重雄君あり、渡瀬巍五郎君あり、前橋に石島良三郎君あり、京師に奥村禎次郎君あり其他各地に熱心なる諸君ありて共に会員の募集、会費の徴収等の事に任し、以て本会の運動に助力せられ、之か為に本会の進歩も甚た速なりき」と報告されている。⁹⁾ 河田重雄、渡瀬巍五郎、奥村禎次郎は、いずれも大江義塾出身者である。奥村禎次郎は当時同志社在学中であったとみられる。また、渡瀬、奥村は後に熊本英学校の教師となっている。¹⁰⁾

表2 『青年思海』『時務評論』発行部数

〔警視庁統計書〕より作成

誌名	年度	東京府	他府県	総計	回数	平均
青年思海	1887	762	1,370	2,132	5	426
青年思海	1888	2,337	7,041	9,378	17	552
青年思海	1889	360	1,131	1,491	2	745
時務評論	1889	2,470	5,549	7,929	12	660

このように青年協会に呼びかけに対して、多数の青年が全国から呼応した。その背景には、受動的読者に自足せず、自己の表現機会を求めている青年が広範に存在していたのである。

こうしたことは、『国民之友』に限ったことではない。『国民之友』の思想的対抗誌『日本人』にも、『青年思海』と類似した『少年子』という雑誌があった。¹¹⁾ 『少年子』については、本論文では詳しく触れることはできないが、その発行母体は志賀重昂など政教社同人を後見人とする協習会という倶楽部であ

る。その目的とするところは、「月に会する数回或は演壇に自己等か思想を吐露し或は論陣に学事を討尋し一は智識を交換し才芸を研磨し他日劇場に踏舞するの準備」となすことにあるとされた。会員は、雑誌に投稿するとともに、東京各所で行われた演説会に参加することとなっていた。ここにも、単なる読者の枠内におさまらない青年達を見ることができる。彼等は、新しい時代を生きるための学習として『国民之友』や『日本人』の読者となり、更にそれを契機に同輩と討論し、交換していこうとしたのである。

しかし、『青年思海』は、その内部に困難な問題を抱えていた。

第一に、『青年思海』の言論が、学術問題に限られ、時事の問題に及ぶことができなかったことである。自由民権運動を抑圧するために制定された明治16年新聞紙条例以来、「学術、技芸、統計、官令又ハ物価報告ニ関スル事項ノ記載スルモノ」（明治20年新聞紙条例第8条）以外の新聞・雑誌は、管轄庁に一定の保証金を納めなければならなかった。これによって、政治言論に参入できる者は一定の資産を持つ階層に限定され、下からの政治言論活動は、事前に抑圧されてしまったのである。これまで、往々にして言論弾圧というと、筆禍事件等にばかり注目しがちであるが、保証金制度によって下からの言論活動の生成の芽が事前につみとられていたことにも注意を向ける必要がある。

『青年思海』が時事問題に言及できない学術雑誌の資格で発行していたのも、保証金を納付できないためであった。同誌はその事情を、「本会の機関たる本誌の今日迄学術上の雑誌として、一毫の未だ政事上の問題を論談する能はさるハ、決して好んで自ら之に居るあらず、只創立の際より之を政治雑誌と為さんと欲せしも、奈何せん発起人の微力なる、自ら其費用を投入することは能はず、又発起人を助けて其費用を貸与する者もなかりしを以て、一時不得已学術雑誌の範囲に止めしのみ」と説明している。¹²⁾これが、『青年思海』（青年協会）の活動に大きな制約になったことは言うまでもない。会員のなかには、政治問題に関する投書をするものも多かつたらしく、「政治に関する論文を御寄送被成候諸君有之右等不得没収仕候に付今後は能々本会の性質を顧み不都合なき様注意して御寄送被下度願上候」（第2号）と会員に注意を呼びかけている。青年達の政治言論、政治意見は、発表されることが許されず、不完全燃焼とならざる

をえなかったのである。

第二の問題は、全国の青年相互のコミュニケーションの実現という目的と青年協会の中心メンバーが保有する主義との間の葛藤であった。「蓋し青年協会の目的ハ天下青年の気脈を通じ天下青年の団結を堅うし、天下青年の智識を涵養し天下青年の元気を発揚せんが為めなり、然るが故に苟も此目的に向て同意同感情の人たる以上ハ何人と雖も即ち宗教家も無宗教家も、自由主義の人も保守主義の人も、西洋的の輸入家も国粹的の保存家も若くハ其書生たり商人たり実業家たり学術家たるを問はず、皆な是等異主義異分子異職業の青年を結合し、其議論を討論して以て我が明治の時代に於て純乎たる青年の一団体を組成せんこと、是れ実に我青年協会発起人の目的にてありし、而して是れ実に我青年協会が成功しつゝある処の目的なり、豈又た我協会に一定の主義ありと云ふ可けんや」³⁹と称された通り、青年協会の掲げた目的からすれば、「異主義異分子異職業の青年」の討論こそが目的であり、会自体には「一定の主義」はないとされていた。

しかし、青年協会の中心は、先に述べた通り大江義塾出身者であり、事実上「一定の主義」を保有していた。それが、会員の批判の対象となることになった。特にキリスト教に関する言説が批判の対象となったのである。例えば、「毎号必ズ一ニノ同シ説法ヲ拝見セヌコトトテハナキ位ナリ是ニ於テ余ハ初メテ知ル矣其所謂有用ノ学理ヲ講究スルトハ所謂名計リノ春雜食ニシテ青年協会トハ実ハ只烏合ノ基督信者ノ集会ニシテ其機関タル青年思海ハ重ニ愚夫愚婦ニ教誡スルーノ説教場ニ過ギザルヲ」などと青年協会の実態がキリスト教信者の組織であるという批判の投書が掲載されている。⁴⁰

青年協会幹部の思想が、一般会員から批判を浴びるだけならば、「異主義」の者の討論という会の目的の実現とも言えなくもない。しかし、それだけでなく、「一定の主義」を持たないという原則は、事実上「一定の主義」を保有している会幹部にとっても制約となった。それは、1888年の同志社大学設立問題で顕在化した。徳富蘇峰と『国民之友』は、自己の勢力拡大に利用しようとする意図もあって、同志社大学設立支援の運動を展開しようとした。青年協会の中心メンバーもこれと連動して資金募集運動を会員に呼びかけようとしたの

である。しかし、青年協会は、会員相互の「智識の交換・思想の融通」それ自体を目的とするのであるから、「一定の主義」を持った運動体とはなりえない。しかも、前述の通り会員の間で反感が存在していたキリスト教に係わる問題であった。そこで、会の幹部は、「青年協会に主義なし青年協会に特性あり、其主義なきハ天下多数の青年を網羅せんが為なり、其特性あるハ青年の方向を指導せんが為なり」という主張を掲げ、¹⁵⁾ 資金募集運動に乗り出そうとした。しかし、青年協会の「特性」の説明として引用されたのは、『青年思海』の前身「新人民」の巻頭言であり、「主義」と「特性」の相違は決して明らかでない。こうした説明が、一般会員にどのように受け取られたかは、不詳であるが、「主義」に賛同する者の支持は得られたであろうが、「智識の交換」という目的に共鳴していた者の反発を招いたのではないだろうか。

第三の問題は、全国青年の「智識を交換し、相共に思想を融通」することを目指しながら、實際上の会の運営は大江義塾関係者中心に偏重していたことである。会則によれば、持主編集印刷及委員の役員が置かれており、これは在京社員の投票によって選出されることになっていた。また、「雑誌二関スル事務ハ一切在東京ノ会員之ヲ担当ス可シ」（第8条第2項）などと實際上会を運営していたのは、在京の会員であった。¹⁶⁾ しかも、在京会員といっても、「其数二百に下らざる在京会員中實際總會の時杯に出席して、其責任を尽すものハ、実に僅少の人々に過ぎず而して此僅少の人々ハ多くハ発起人たり、然らざるも発起人と因縁浅からざる人々に過ぎされハ」というのが、実情であった。役員に選出されたのも、すべて大江義塾関係者のみである。雑誌編集は緒方直清。彼の死後は上野岩太郎が担当した。青年協会の組織は、大江義塾関係者中心の運営から脱却できなかつたのである。

また、会則によれば、会員は『青年思海』に投稿できることになっており、各号の「寄書」欄には、地方会員の投稿と見られる文章が掲載されている。しかし、論説欄の論文のほとんどは、大江義塾関係者のものである。論説57篇のうち、27篇が大江義塾関係者執筆である。¹⁷⁾ 残りの30篇の論説のうち17篇がペンネームで筆者不明、それ以外も、特別寄書家の論説が多く、一般会員の論文は相対的に少数である。言論活動でも、大江義塾関係者中心という色彩は、ぬ

ぐえなかったのである。¹⁸⁾

以上のような難問を抱えていた『青年思海』の活動は、1888(明治21)年後半頃から転機を迎えることになった。それは、前記の難問の打開策として、『青年思海』を政治雑誌に変更し、性格をはっきりさせることが会の幹部の間からもちあがったことである。また、会運営の中心であった緒方直清の死去、緒方の跡をついだ上野岩太郎の退社等の事情が重なり、1889(明治21)年1月、『青年思海』の一切の責任を発起人が負担することとした。同時に、雑誌は時評社の発行となり、『時務評論』と改題、政治雑誌となった。¹⁹⁾ 雑誌の性格変更によって難問の一つは解決した。だが、反面では、これ以降も、雑誌には投書欄が設置されてはいたものの形式化し、会員相互の「智識の交換」それ自体を目的とするという基本原則は失われてしまったのである。

このように、『国民之友』から刺激を受けながらも、独自の相互間コミュニケーションの展開を目指した『青年思海』の言論活動は、明治国家体制の言論政策の制約、自らの内部に抱えた難問を解決できないまま当初の目的を失っていった。しかし、そこに示された青年の活動は、更に大きな波紋を広げていくことになったのである。

4

殆ど無名の青年であった大江義塾関係者が、呼びかけた青年協会が多数の地方青年の参加を得たということは、地方知識青年層にそうした呼びかけに敏感に反応する状況が存在していたことを示している。明治10年代以来の地方知識青年層の自主的な学習活動が、この時期まで持続されていたのである。全国各地に知識青年層を中心とする学習会、読書会が数多く存在しており、それぞれが独自の活動を行っていた。ここでは、こうした地方の学習活動全般について述べることはできないが、例えば、山形県では、明治10年代後半から明治20年代初頭にかけて、県内各地に39の農村結社が存在し、「智徳増進」などのため書籍購読・演説討論などの活動を行っていた。²⁰⁾ 青森県でも、北辰堂(1883年弘前)、明治堂(1884年弘前)、精交会(1887年弘前)といった青年会が結成され、身体の鍛練と共に書籍・雑誌を購読し、討論・演説を行っていたとい

う。²¹⁾ また、豪農のなかには、図書館を設置し、開放した例も珍しくない。例えば、群馬県安中の湯浅治郎は、便覧社という私設図書館を設置していた。²²⁾

各地の学習活動は、手本となる教育課程が存在した訳ではなく、手探りの問題探索的活動であった。それぞれの置かれた条件、指導者の個性等によって、その方向性に相当の幅が存在していた。しかし、次第に大きな比重を占めていくようになったのは、「文明開化」の潮流に乗った英学である。英学こそ、新しい世界の地図を提供する学問と感じられたのである。但し、伝統的な和漢学が簡単に衰退した訳ではなく、言葉の世界・抽象的知識の世界への入り口として和漢学は、依然として有力であった。香川県の大地主の息子に生まれた宮武外骨（1884年生）は、新知識を吸収しようと英学の学習を志したが、先輩から地主の教養としては漢学の方がよいと説得され漢学に転じたという。²³⁾ また、個人においては、英学と和漢学とが両立していることも決して珍しくなかったのである。しかし、大勢としては、英学が次第に隆盛に向かい、地方にも浸透していった。

英学といっても、多様な内容を含んでいたが、その中で明確な方向性を形成するようになったのが、西欧政治思想とキリスト教であった。西欧政治思想の学習は、これまでの研究でも既に明らかにされているが、自由民権運動衰退後も憲法・議会制・政治史等が熱心に学ばれていた。

しかし、この時期の地方社会において西欧政治思想以上に多面的な影響をあたえたのは、キリスト教であった。明治10年代後半、キリスト教の浸透も目覚ましいものがある。表3の通り、この時期教会数、信徒数ともに顕著な増加を示している。それは、キリスト教の側から言えば、1883（明治16）年のリバイバル以降の熱狂的布教活動の成果であった。また、受け手側からすれば、キリスト教は文明開化の時代の生き方を示す新しい宗教というだけでなく、西欧の様々な文化や思想の集約として学習されたのである。各地の教会やキリスト教徒を中心とする集会は、政治や社会などの新しい知識を学ぶ文化運動という性格をも持っていたのである。

そして、地方の学習熱の中から、私塾や英学校等の教育機関が設立されることも少なくなかった。表4に示した通り、明治10年代後半、英学校は著しく増

表3 キリスト教信徒動向

	教会数	会員数
明治11年	44	1,617
12年	64	2,710
14年	83	3,811
15年	93	4,367
16年	不明	5,591
17年	120	7,791
18年	169	10,775
19年	193	13,269
20年	221	18,019
21年	249	23,564
22年	274	28,977

明治13年は、原文にも欠。会員数は、原文では「日本人教会会員数」と表記されている。海老沢有道、大内三郎『日本キリスト教史』P194（1970 日本基督教団出版局）

表4 各種学校学科別統計

（帝国統計年鑑より作成。英学、和漢学以外は省略）

年 度	英 学			和 漢 学		
	学 校	教師数	生徒数	学 校	教師数	生徒数
明治15	52	209	4,563	704	1,044	33,167
〃 16	57	279	5,911	722	1,144	33,098
〃 17	74	232	5,724	769	1,186	33,126
〃 18	139	374	10,950	814	1,270	32,126
〃 19	221	593	17,580	820	1,340	32,442
〃 20	335	991	26,404	774	1,288	27,920
〃 21	356	1,302	27,135	744	1,396	29,606
〃 22	294	1,207	20,363	745	1,435	29,982
〃 23	245	1,026	20,651	703	1,512	30,467
〃 24	173	679	12,524	720	1,638	31,590
〃 25	102	318	5,640	530	900	19,550

加していった。それは、西欧政治思想学習、キリスト教の台頭と重合した文化潮流を形成していたのである。

徳富猪一郎が熊本郊外に構えた大江義塾も、こうした広範な学習熱のなかの一つであった。『国民之友』とその「泰西主義」が、彼等と同様な地方知識青年層の共鳴を引き起こしたのも、当然と言えよう。

地方知識青年は、学習活動の一環として『国民之友』や『青年思海』などの読者となっていた。しかも、彼等は読者であるだけでなく、自ら書き、自ら演説する活動をも組織していったのである。そこでは、中央で発刊された図書・雑誌を購読することと、彼等自ら演説し、あるいは雑誌を発行するという言論活動とは、一連の活動であった。彼等は、受動的読者ではなく、自らが言論の主体であろうとしたのである。

5

こうした地方知識青年の活動の一事例として、群馬県を取り上げることとする。群馬県は、新島襄の出身地であるばかりでなく、民友社の支援者である湯浅治郎の地盤でもあった。この他にも、群馬県と民友社は様々な関係を有し、民友社の有力の地盤となっていた。その地で起こった青年運動は、民友社ジャーナリズムと地方青年の相互関係について集約的に考察できる事例といえるだろう。

群馬県前橋では、1886（明治19）年12月、芳賀金登（群馬県出身）、志倉直吉（東京出身）、武田信（新潟県出身）という3名の青年の発起によって青年会結成の動きが起こった。翌1887（明治20）年1月5日、60余人の青年が参集して正式の発会式があげられ、会の名称を上毛青年会とすることとした。当日、選挙によって幹事に選出されたのは、竹越与三郎、高津仲次郎、石島良三郎の3名である。竹越は当時前橋英学校教師、高津は県内屈指の養蚕家の生まれで旧自由党以来の政治家である。石島の経歴等は不明であるが、前橋教会の信徒であったと推定される。上毛青年会結成時点での趣旨等は不明だが、青年会結成は、『国民之友』創刊以前であり、蘇峰の『将来之日本』の刊行が刺激になっているかもしれないが、群馬の地方青年独自の自生的運動である。²⁴⁾

上毛青年会は、青年談話会を後援して前橋有力者の社会的弊習を告発する「出て懇会事件」などを起こし、地域社会に新風を吹き込んだ。²⁶⁾ また、前述した青年協会が結成されるや、上毛青年会の中心的活動家のほとんどが青年協会に参加した。青年協会の呼びかけに応えたのはこのような青年達であったのである。

さらに、1888（明治21）年年末頃から雑誌発行が計画され、1889（明治22）年1月15日『上毛青年会雑誌』（発行人 石島良三郎。編集人 永井元）が発行された。これによって、青年会の活動は一段と活発化した。雑誌の発行部数は、表5の通り700部前後であるが、各地青年団体などで購読・輪読されたであろう。『上毛青年会雑誌』の内容の詳細な分析はここでは控えるが、「平民主義」「新日本の青年」といった言葉が多用され、『国民之友』の影響は顕著である。『国民之友』は、自主的活動を続けてきた地方青年に自己を表現する言葉を与えたと言えるだろう。

表5 「上毛之青年」発行

年度	管内	管内	合計	回数	平均	収入
明治22	7,125	895	8,020	12	668	320.80
明治23	7,086	1,383	8,469	12	705	366.64

「群馬県警察統計表」より作成

このような青年の運動は、前橋だけではなく、1889年1月5日の上毛青年会春季大会には、北甘楽、伊勢崎、藤岡、渋川、大間々などから青年が参加したごとく、県内各地で青年の自主的活動が叢生していたのである。だが、こうした自主的だが孤立した活動がマンネリ化することも避け難く、その状況についてある会員は、次のように描写している。（青年会の多くは）「面白半分ヲ以テ組織シタリシヲ以テ今ヤ一會中弁論ノ達者ナルモノモ数人ニ定マリ學問ノ少シク進歩セシモノモ感アルニ至リシヲ以テ其演説モ自然面白カラス其討論モ自然愉快ナラス為メニ少シク其鋭氣ヲ挫シキ是迄隔日ノ討論会ハ五日オキトナリ十日オキトナリ終ニハ再タヒ固トノ睡眠ニ入ラン」という。

その時に前橋の上毛青年会が結成され、「上毛の青年会に向て一の革命を与

へし原動力」となった。²⁶⁾そして、「明治二十一、二年ノ頃コソ実ニ上毛ノ天地ハ青年会ノ流行トモ称スヘキノ時代」が出現したのである。

各地の青年会は、上毛青年会の指導のもとに結集し、1889（明治22）年7月14日に上毛青年連合会を結成するまでにいたった。これには、当初、17の青年団体が参加し、1890年10月には23団体となった。また、上毛青年連合会結成と同時に『上毛青年会雑誌』は、連合会の機関誌となり、『上毛之青年』と改題された。

こうした群馬県における青年運動の社会的背景として挙げることは、第一にはキリスト教、第二には英学の学習熱、第三にはそれらと連動した県下政界の動向である。群馬県のキリスト教については、既に優れた先行研究があり、ここで改めて詳述するまでもないが、当時の群馬県は「プロテスタント教界の最も有力なる県」であった。²⁷⁾ 県内には安中教会（1878年設立）、前橋教会（1886年設立）を初め7か所の教会があり、1887（明治20）年には985名の信徒がいた。上毛青年会会員の経歴には分からぬ者が多いが、中心的活動家のうち石島良三郎、井上浦蔵²⁸⁾、永井元、大竹勝衛、青柳新米、寺沢精一、住谷八朔、佐竹篤等はキリスト教徒であった。また、前橋教会牧師不破唯次郎、同執事田中耕太郎も青年会会員であった。

第二の英学熱について言えば、群馬県では1887年前後に英学学習熱が急速に高まってきた。萩原進氏は、その原因について「拝欧主義の台頭、内地雑居論の影響、キリスト教の普及及び私塾の外国語採用」を挙げている。²⁹⁾ 底流として存在してきた下からの学習活動が、外国との交流・キリスト教などの影響によって欧米の学問の学習を一段と促進したと見ることができる。1887年に、県内には17の英学校が存在し、471名の生徒が学んでいた。³⁰⁾ 前橋では、1886年前橋英学校が前橋の有力者によって設立され、竹越与三郎が教師に迎えられた。竹越は、高崎英和学校の開校にも尽力している。碓氷郡では、宮口二郎等が世話人となり、碓氷英学校が設立された。教師は、梶原保人、緒方正修であった。両名とも熊本県出身で、梶原は大江義塾、緒方は同志社出身。緒方は、上毛青年会会員であった。また、勢多郡にも刀川英学校が1887年開校された。この教師を務めたのは、大江義塾出身の渡瀬昌雄である。渡瀬は、熱心なキリスト

教信者で授業の前に生徒に祈祷させたという。³¹⁾ 渡瀬もまた上毛青年会会員であった。

また、宮口等の県会議員は、県立英学校の設置を熱心に運動していた。その英学校構想では、全て英語によって授業を行うことが考えられていたという。³²⁾

このように英学校は、蘇峰の言う「泰西主義」の地方における象徴的存在であり、知識青年の活動の拠点となっていたのである。外部から招かれた教師は、新思想の導入者であり、特にキリスト教の布教と関係していることが多かった。群馬県では、英学校以外の一般の小学校教師にも、大竹勝衛、佐竹篤、平田芳朗等熱心なキリスト教徒で上毛青年会会員である者もいた。

第三の問題は、地方政界との関係である。青年会は、石島等の青年が実質的な活動を担っていたが、その背後には県議会議員クラスの政治家がおり青年の運動を支援していたのである。上毛青年会を支援した県議会議員の一群は、湯浅治郎、宮口二郎、多賀恒信等のキリスト教信徒であった。彼等は、キリスト教の関係から青年会を支援したのであろう。特に彼等は、先に述べた英学校の支援者でもあった。また、青年会支援の政治家群には、高津仲次郎、新井竜、桑原静一、中島半三郎等のかつての自由民権運動の活動家もいた。彼等は、民権運動衰退後の状況のなかで新方向を青年運動に期待していたと見られる。

そして、それら政治家が、第1回衆議院議員選挙を控えて、地元政界再編成に青年運動のエネルギーを活用しようとする政治的狙いを持っていたことは確かである。

ともかくも、群馬の青年運動は、地元政治・経済の指導的部分と密接に結びついた運動であったのである。

こうして、1889年頃、群馬県では、青年会の活動を中心に言論・運動の活性化状況が現出したのである。それは、民友社と人的・思想的関係を持ち、『国民之友』の成功に大きな刺激を受けてはいたが、単なる被影響者という存在ではなく、下からの独自性を持った運動であったのである。そして、その青年の運動は、著名な廃娼運動に発展していった。³³⁾

廃娼運動そのものについて、ここでは詳述できないが、湯浅治郎県会議長以下県議員が県議会を主導する一方、議会外における運動を指導・組織化した

のは上毛青年連合会であった。青年連合会は、各地に演説会・集会を開催し、輿論の振興に大きな役割を果たした。さらに多数の署名を集め、県議会、元老院に建議するなどの彼等の運動は全国的にも注目を集めるまでになったのである。

民友社とごく近く所から発生した社会改良運動に対して、『国民之友』は理解を示しながらも、廢娼を積極的に主張する立場はとらなかった。社説等で明確な廢娼論を唱え、下からの運動を支援することはなかったのである。³⁴⁾

寧ろ、この時期の『国民之友』の主たる関心は、条約改正問題や政界再編成問題といった中央政治の問題にあった。逆に、条約改正問題などに関しては、群馬の青年に対する『国民之友』の影響は限界があった。上毛青年連合会は、政治結社ではなく、『上毛之青年』は政治論議は避けられたため青年会員の政治意識を知ることは困難であるが、演説会の報道記事によれば、青年会の中心メンバーであった石島良三郎等は条約改正反対を主張し、運動していた。これは、大隈の条約改正を支持していた『国民之友』とは反対の立場である。石島等の条約改正反対論の内容まで知ることはできないが、ここにも彼等の運動が『国民之友』の単なる被影響者ではなかったことがうかがえるのである。

しかも、こうした青年の運動は上毛青年会だけの孤立した運動ではなく、全国各地に同様な青年の運動が起り、多くの青年雑誌が発行されていたのである。例えば、『西毛時事』（群馬）、『知青年』（鳥取県 山陰基督教青年会）、『青年会雑誌』（岡山 中国基督教青年会館）、『明治之青年』（秋田 明治青年会）、『光』（千葉印旛郡 北総禁酒会編集局）、『政海之潮』（三重県青年連合会）、『弾丸』（新潟 高田青年会）、『有隣会雑誌』（新潟 有隣会）、『丹海之燈台』（丹後 丹海社）等である。これらの青年の運動は、キリスト教青年会との関係が深いものが多いが、それだけではなく、それぞれの地域の独自の運動として展開されていったのである。さらに注目されるのは、これらの雑誌が相互に交換し合うなどの交流をつくりだしていたことである。各雑誌では、他誌を自誌上で紹介批評しあい、広告を掲載し購読の便宜をはかるなどを行っていた。そこには、地方青年同士相互の体験の交流・相互活性化がある程度実現していたのである。その交流は、当時アメリカ西海岸で活動していた青年達の発行し

ていた『自由』『蒸気船』という雑誌にまで及んでいた。

先に触れた通り『国民之友』は「新日本之青年」という同輩者意識を醸成したが、地方の青年を実際に結びつけることはなかった。それに対し、青年協会は東京の大江義塾出身青年と地方青年との間の交流を『青年思海』という雑誌によって作ろうとしたのである。だが、そこでも地方の青年は互いに直接交流し合うことは十分にできなかった。ところが、それぞれの地域の青年は、それぞれ独自の言論活動を起こし、互いの雑誌を交換し合う連鎖状の交流を実現していったのである。そこでは、一つのメディアを中心とする求心的結合ではなく、多数の雑誌の横断的ネットワークが形成されていた。

こうした交流は、キリスト教組織や青年協会によって互いの存在を知り、雑誌を交換したのが、直接的契機になったのであろう。だがそうした直接的契機がなんであれ、地方青年がそれぞれが独自に地域社会のなかで問題に取り組むうちで、『国民之友』の議論だけでは満足できない所を感じ、同様の運動を行っている者達の体験を交換し合いたいという欲求が交流を生みだしていった。そして、こうした下からの自主的な言論活動と相互の連鎖的交流は、『国民之友』の刺激を受けてはいたが、『国民之友』が作りだした中央知識人から地方へという一方通行的コミュニケーションとは別なゆるやかであるが横断的な社会的コミュニケーションを作りだそうとしていたのである。

6

しかし、こうした地方の青年の言論活動は、1891（明治24）年に入る頃から次第に衰退していく傾向を示した。衰退の要因については、それぞれの固有の要因が存在し、一概に論ずることは困難であるが、群馬県における衰退の様相を略述することとする。

『上毛之青年』は、1891（明治24）年1月号（第25号）に「廃刊の辞」を掲げ、終刊となった。上毛青年会は以後も存続したが、運動は活動力を失っていた。雑誌廃刊の理由は、「廃刊の辞」によれば雑誌を政治雑誌とするために必要な保証金を某氏から借金したが、「今や返済の期に至り、更に他に倚りて金員を借らんと欲せしも、他皆な逡巡、進んで吾人の需めに応ずる者なし、是

れ廃刊の己むを得ざる所以なり」ということであった。保証金の額は、青年会独自の資金調達力を越えており、雑誌発行を継続するだけで青年会は過重の負担を背負わねばならなかったのである。前述した『青年思海』と同様に、新聞紙条例の保証金制度は、下からの非商業的言論活動にとって苛酷な圧制となっていた。この制度によって、多くの自主的政治言論が声をあげる以前に潰えさり、あるいは漸くメディアを持てたとしても、それを永続させるのは甚だ困難であった。保証金制度は下からの言論活動封じ込め、結果として受動的読者の形成させることになったのである。

第二の問題は、教育勅語発布などの思想的締め付けが強化され、キリスト教・英学が退潮に向かったことである。1890年の教育勅語以降、全国的にキリスト教への圧迫が強まっていった。1891年の内村鑑三不敬事件は象徴的事件である。また、民間の英学熱も次第に冷え、群馬県でも各地の英学校は不振に陥っていった。

また第三には、青年の運動が、総選挙を控えての政界再編成に巻き込まれていった事情もある。青年会を支援していた政治家は旧自由民権運動以来の関係あるいは選挙区の関係などから錯綜した離合集散を繰り返していった。青年会自体は、政治に関与することは避けていたが、個々の青年活動家は政治結社に参加していたし、政党に系列化されていった。そこでは、否応なく青年の運動も政治と結びつき、活動力をそがれていったのである。

これらの諸要因が重なりあいながら、群馬県では青年会の運動は、次第に衰退していった。恐らく他の地方でも同様な事情によって衰退していったと推測できる。

このように下からの言論活動が封じ込まれることによって、能動的読者は、受動的読者となっていったのである。そして、それと表裏の関係として、『国民之友』の作りだしていく中央知識人の言論は、商業化していくことになる。³⁵⁾

[註]

- 1) 『蘇峰自伝』223ページ(1935年 中央公論社)
- 2) 『警視庁統計書』より算出。

- 3) 詳しくは、拙稿「言論の商業化—明治20年代『国民之友』成城大学『コミュニケーション紀要』第4輯（1986年）参照。
- 4) 花立三郎『大江義塾——民族私塾の教育と思想』（1982年ペリカン社）78ページによれば、32名が相次いで上京したという。
- 5) 「青年協会の沿革及将来の運動」『青年思海』第18号。
- 6) 花立前掲書310ページ。花立氏によれば、ほとんどが大江社のメンバーであるという。大江社は、大江義塾内に結成された徳富蘇峰支持の「同志的結束」（花立前掲書63ページ）である。
- 7) 7月5日に『新人民』という題名の雑誌を見本として刊行したが、内務省が学術雑誌の名称としては不相当であるとして許可しなかったため、『青年思海』と改題し発行したという。

『青年思海』創刊号の発行所は、「青年協会 東京麻布区笹笥町壱番地。持主 人見一太郎。編集 緒方直清。印刷 池本吉治」

第5号（明治20年11月15日）からは、「発行所 青年協会 東京麻布区榎坂町5番地民友社内。持主兼印刷人 池本吉治。編集人 緒方直清」

第12号（明治21年7月20日）からは、「発行所 青年協会 東京麹町区富士見町1丁目34番地。発行兼印刷人 池本吉治。仮編集人 八木廉」

第13号（明治21年8月15日）の「青年協会会告」に「本会編集人の儀倉卒の際にて八木廉氏に依頼仕置候得共同氏ハ平生多忙の身にて實際編集の任に当り難き由を以て辞職有之候に付き委員一同集会上更に上野岩太郎氏に依頼仕候也」とあり、同号から「発行所…日本青年協会 東京麹町富士見町1丁目34番地。発行兼印刷人…池本吉治。編集人…上野岩太郎」となった。

第17号より発行所住所変更、東京京橋区瀧山町8番地

- 8) 名簿には重複記載も多いようだが、そのまま計算した。
- 9) 「青年協会の沿革及将来の運動」第18号（明治22年1月15日）。
- 10) 奥村禎次郎は、明治25年いわゆる「奥村禎次郎眼中無国家事件」によって熊本英学校を辞職させられた人物である。この事件については、上野一之「熊本における教育と宗教との衝突」『近代熊本』第17号（1975年）

参照。

- 11) 『少年子』創刊、廃刊不明。第2号は、明治21年9月20日発行である。
- 12) 前掲「青年協会の沿革及将来の運動」。
- 13) 「青年協会の特性」(明治21年11月15日)。
- 14) 熊本D.S.生「質疑」第14号。また、第12号にも「(前略)青年思海に有るべくして有らざるは学術的の議論にして無る可くして有るハ宗教的の説法なり(以下略)」R.T.K.M.「青年思海の漫評」という投書が掲載されている。
- 15) 前掲「青年協会の特性」。
- 16) 明治20年10月15日と明治21年11月3日の2回会則の改定が行われたが、役員の変更であり、在京会員中心の運営には変わりがない。
- 17) 花立三郎『大江義塾』318ページ。『青年思海』の大江義塾関係者執筆の論説の詳しい分析は、同書315ページ以下参照。
- 18) 花立三郎氏は、『青年思海』を「過大ない方になるかもしれないが、大江義塾関係者の同人誌という観があり」と述べている(前掲『大江義塾』P318)。
- 19) 保証金を誰が負担したかは不明だが、「是非とも協会員より別に負担者を定めざる可らざる事」(第19号)とあることからすると、会員以外から出資者を募ったと推定される。時評社に経営者がいたとも考えられる。
- 20) 山形県の事例については、和田守氏の御教示によった。また、北村透谷が参加したという明治17年の読書会も、このような学習活動の1つとしてあげることができる。(色川大吉「明治17年読書会雑記について」『文学』1959年6月号)。
- 21) 間山洋八『青森県読書運動明治大正史』(1981年 津軽書房)。
- 22) 『湯浅治郎』(昭和7年 有田屋)。
- 23) 吉野孝雄編『予は危険人物なり 宮武外骨自叙伝』(1985年 筑摩書房) 32ページ。
- 24) 「上毛青年会小歴史」『上毛青年会雑誌』第1号。この時期の徳富蘇峰については、拙著『徳富蘇峰と国民新聞』(1992年 吉川弘文館)で

論じた。上毛青年連合会を蘇峰思想の影響という観点から論じたものに、和田守「蘇峰と上毛青年連合会」『民友』78号～80号（1971年）がある。また、この時期の地方青年の活動に関しては、近年発掘があい次いでいるが、一例として今西一「近代日本成立期の民衆運動」（1991年柏書房）。

- 25) 萩原進『群馬県青年史』（1957年 国書刊行会）327ページ。
- 26) 独嘯生「吾人の経歴を叙して後來に望む」第28号。
- 27) 大浜徹也『明治キリスト教会史』（1979年 吉川弘文館）。群馬県のキリスト教については、森岡清美『日本近代社会とキリスト教』（1976年 評論社）。同「上州の初代キリスト者たち」『文学』1979年1月号などによった。
- 28) 井上浦蔵については、『華甲記念後凋先生文集』（昭和3年 後凋先生詩文刊行会）によった。また、この時期の竹越与三郎については、飯田裕子「若き日の竹越与三郎—前橋時代をめぐって—」『地方史研究』139号（1976年2月号）参照。
- 29) 萩原進『群馬県史明治時代』（1959年 国書刊行会）556ページ。
- 30) 萩原進『群馬県史明治時代』590ページ。
- 31) 萩原進『群馬県史明治時代』586ページ。
- 32) 『群馬県議会史』第1巻 835ページ。
- 33) 廃娼運動については、『群馬県議会史』第1巻参照。
- 34) 『国民之友』「時事」欄で廃娼問題を短評した例は、4例ある。例えば、第72号「廃娼と存娼」では、「宗教家は道德の眼孔より廃娼を論じ、医師は衛生の眼孔より存娼を主張し、今や廃娼、存娼の論は、宗教家との一大戦争となれり、道德の力強からんか、廃娼論は我邦の輿論を制すへし、衛生を重んずるの念勝んか、存娼論我邦の輿論を制せん、吾人き固より廃娼を賛成する者なり、然れとも亦直に学理上、若しくは實際の必要上、存娼を主張する者を悪まず」と、やや一步距離を置いた態度で論じている。前掲拙著参照。
- 35) 『国民之友』の商業化については、前掲拙稿「言論の商業化」参照。